

- 小木曾, 杉浦: 薬剂学 **24**, 掲載予定 (1965).
 10) Anson: J. Gen. Physiol. **22**, 79 (1938).
 11) 山田, 町田: 農化 **30**, 860 (1962).
 12) 岡崎, 石川: 薬剂学 **24**, 72 (1964).
 13) J. V. Fiore, F. F. Nord: Arch. Biochem. Biophys. **23**, 473 (1949).
 14) 杉浦, 長瀬, 加藤, 広瀬: 薬剂学 **24**, 掲載予定 (1965).
 15) 岡崎, 石川: 薬剂学 **23**, 154 (1963).
 16) 杉浦: 薬剂学 **24**, 206 (1964).

菅野正彦: Confessio Amantis の表現

Masahiko Kanno: The Expression of Confessio Amantis

これまでの文学・語学の領域を問わず, Gower の作品に対して指摘されてきたことは, 広く文体と云う面で, 文体が “simple” であるとか “plain” であるとか, あるいは “genuine, pure, gracious” 等の様々な言葉が用いられている。しかし反面, 調子が “dull” であり, 又 “monotonous” であると批評されてきた。この二面を保持している作品であることは確である。詩形は “octosyllabic couplet” であり, そのため調子が単調に流れ易い。また同時に表現が簡明 (simple) であるということは, しばしば散文的になり易い傾向を持つのである。表現が “simple” であると言うことは, 幼稚であるということとは別で, 飾り気の少ない文体には, またそれなりに詩的な力強さや, あるいはまた美しさというものが生れてくるのである。よく指摘されるように, 「後代には見られないような新鮮さ」というものを備えている。その要素を一言でいい表わすならば, 「文体が “modest” である, あるいは “chaste” である」ということにも大いに関係するところでもある。ここで “simple” という語を用いるのは, 以上のような意味を含ませて, Gower の特徴的な表現に触れてみたいと思う。

Rosiphilee 物語は, 作品中ではよくまとまった詩の一つであり, つぎの様な表現に出会う。

It thoghte hir fair, and seide, “Here
 I wole abide under the schawe”:
 And bad hire wommen to withdrawe,
 And ther sche stod *al one stille*,
 To thenke what was in hir wille (iv, 1292-1296)

彼女が朝早く眼を覚まして, 侍女達と一緒に庭を散歩し, 大きな川の側にやって来た所の描写である。“schawe” というのは, 小さな森の意味である。下線をほどこした部分は, Gower のよく使う方法で, 一般に人々の思いとか考えとかをわれわれ audience に話さないのである。上記の文だけに限って考えて見ると, 何一つ技巧らしい技巧も用いないで, 平易に語っているけれども, 詩人が語らないことが, 一層森の静けさというものを浮き立たせる結果になっている。詩人が此の様な効果を意識的にねらったかどうか, はっきりと断定はできないけれども, 簡明な表現が与える長所の一つである。

反面, 詩人が推敲して描き出した美しさも見逃すことはできない。第一版では,

The beaute of hire face schon
 Wel bryhtere than the Cristall ston

となっており、次の版では、

The beaute of here faye face
Ther mai non erthly thing deface

と改め、結局第三版で、

The beaute faye upon her face
Non erthly thing it may desface (iv, 1321—1322)

と定着させたのである。此の推移を考えて見るとき、散文的な描写から、詩的な描写へと意識的な態度が窺われ、beaute faye 以下の一行を生み出したものと考えられる。このように、意識的な文体と、無意識的な文体とが合体しているのであるが、plain style (簡明な表現) といわれるものは、分析が非常に困難で、ある時は一語で効果を表わす場合もあり、またある時は長い行に亘る場合もある。

Gowerのartistic device という面に触れるなら、octosyllabic の詩形も一つの問題になる。第八章、2217行以下の、Cupide と Venus に対する supplication (祈願) は decasyllabic で書かれている。このことについて Macaulay はつぎのように註をしている。

This “Supplication” is a finished and successful composition in its way, and it may make us desire that our author had written more of the same kind.

ただ、Gower にとっては、octosyllabic という詩形の中で、英語のもつ accent と、フランス語の syllable、この二つの要素を結合する試みをなし、それに成功したと解せられる。

metaphor (比喩的表現) については、一般に欠けており、またそれは作品を特徴づけるだけの役割を詩の中で果していないといわれている。

Stille as eny ston (i, 1794),

blake as eny cole (v, 6204) のように単に常套的な “simile” を考慮に入れても、使用されているものは僅かで、また比較の対照にもってこられるものにしても、ある種の動物、仮えば Lyon (v, 5684), bear, brid (v, 5700), cok (v, 4070), hen (v, 4097), また二・三の植物等であり、非常に限られた身近かなものが多い。

つぎに引用する文章は、Medea が最夜中に、魔力 “enchantment” を求めてさ迷う描写である。

The world was stille on every side;
With open hed and fot al bare,
Hir her tosprad sche gan to fare,
Upon hir clothes gert sche was,
Al specheles and *on the gras*
Sche glod forth as an Addre doth:
Non otherwise sche ne goth,
Til sche cam to the freisshe flod,
And there a while sche withstod.
Thries sche torned hire aboute,
And thries ek sche gan doun loute
And in the flod sche wette hir her,

And thries on the water ther
 Sche gaspeth with a drecchinge onde,
 And tho sche tok hir speche on honde. (v, 3962 ff)

此処でただ単に“simile”を問題にするよりも、むしろ Macaulay の指摘する詩的力 (poetic power) の方がもっと大切であろうかと思う。この描写は Ovid によっていることは勿論であるが、下線部の後半の部分、すなわち “as an Addre doth” は Gower 自身が書き加えたものである。原典よりもこの描写が詳しく、力強いことは、批評家の指摘するところである。

時間を真夜中に置き、“stille”, “specheless” というように“静寂”を表わす語と、“fare”, “cam”, “torned” 以下の“動”を表わす語とが対照的になっており、「草の上を蛇の様にゆっくりはって行く」という動と静とが合体して、異様さを一層異様なものにした“simile”である。

つぎに引用する“simile”も Gower 自身によっているといわれるものである。

Lich to the chaced wylde bor,
 The houndes whan he fieleth sor,
 Tothroweth and goth forth his weie,
 In such a wise forto seie
 This worthi kniht with swerd on honde
 His weie made, and thei him wonde,
 That non of hem his strokes kepte; (vii, 5255—5261)

前文と比較すると、構造がやや不規則であるけれども、「追われる猪が身の危険を感じた時は、猟犬を両側に投げ飛ばして突き進む様に、すなわちそのように勇敢な騎士は……」という意味で、力強さがあり、しかも分り易い simile である。ただ全体的に、構文が示しているように、意識的な要素が多く入っている。

もう一つ“simile”について言及すると、つぎの文章は、夫に対して流した Lucrece の涙の描写である。

With that the water in hire yhe
 Aros, that sche ne myhte it stoppe,
 And as men sen *the dew bedroppe*
The leves and the floures eke,
Riht so upon hire whyte cheke
The wofull salte teres felle.
 Whan Collatin hath herd hire telle
 The menyng of hire trewe herte,
 Anon with that to hire he sterte,
 And seide, “Lo, mi goode diere,
 Nou is he come to you hierre,
 That ye most loven, as ye sein.”
 And sche with goodly chiere ayein
 Beclipte him in hire armes smale,

And the colour, with erst was pale,
 To Beaute thanne was restored,
 So that it myhte noght be mored. (vii, 4830-4846)

先にあげた「勇敢な騎士の進む様と、追われる猪」との対比に感じられた文体上の不協和音は、この文章の中では見られない。流れる涙を、草花にかかる露に喩える表現は別段新らしいものではないけれども、この比喩が一層涙を新鮮なものにし、後半、夫 Collatin が現れた時、彼女の顔に美しさがよみがえってくる様と大きな対照をなして、光っているのである。

この他に、三人の beggars のあごひげの白い様子を、as a bush that is besnewed と喩えたり、あるいは Jason が持ち帰る金のフリース (golden fleece) の輝きを、bright and hot と表わし、Medea に対して成功したこと合図に用いたりしている。

Gower が詩を書くに当って、深く考えたのは、形(shape)とか色彩(colour)とかではなく、動き(movement)ということである。すなわち、行為とかでき事、事件の動きが主となっている。それらを表わす表現上の特徴は、随所に窺えるけれども、特に自分の妻が殺害されている部屋に夫 Elda が帰ってきたとき、その場の光景については何ら触れていないのである。

Elda cam hom the same nyht,
 And stille with a prive lyht,
 As he that wolde noght awake
 His wif, he *hath his weie take*
Into the chambre, and ther liggende... (ii, 835-9)

あるいはまた、Appolonius が上船するとき、

Up to the Sky he caste his lok,
 And syh the wynd was covenable. (viii, 1928-9)

と businesslike に簡単に述べているけれども、詩としてのまとまりを見せている。動き(movement)ということが、物語詩人としての Gower の力であるとも考えられ得る。

これまで“simile”と表現された動きについて大まかに見てきたが、Diction の問題に入りたい。

Diction に対して彼の払った注意は、特に形容詞と名詞との結合であると考えられる。

Alle *olde* sorwes ben foryete,
 And gladen hem with joies *newe*: (viii, 1906-7)

の表現は

The *newe* schame of Sennes *olde* (vii, 5116)

と凝縮された表現となって現われ、new と old が contrast して用いられているが、此の一行の中に、C. S. Lewis は、“gentle”あるいは“fanciful”な要素を認めている。彼が随所で長々と描いた嵐の描写も、

The tempeste of *the blake cloude*,
The wode See, the wyndes loude (iv, 3063-4)

と凝縮され、Alceone の想い、姿を vivid にしている。このような簡単な用語の中に、力強さというものが窺えるのである。

つぎに頭韻 (Alliteration) について考えてみよう。G. C. Macaulay はテキストの中でつぎのように述べている。

Alliteration is used by Gower in a manner which is especially characteristic of the new artistic style of poetry.

確かに Gower は形式的な Alliteration と、versification の要素としての Alliteration とを使っている。まず形式的なものとしては、つぎの如きものである。

It were betre *dike* and *delve* (Prol. 352)
 And evere his chiere is *sobre* and *softe* (i, 619)
 Albinus slow him in the feld,
 Ther halp him nowther *swerd* ne *scheld* (i, 2469-70)
 And thus thei *casten care* aweie (i, 2516)
 Thei bere of *fisshe* the *figure* (i, 491)

またつぎのような同形のもが現われる。

He syh upon the *grene gras*
 The *faire freisshe floures* springe (i, 352-3)
 For in the wynter *freysse* and *faire*
 The *floures* ben, (i, 2355-6)

つぎの例は versification の要素とも考えられ得る。

Thanne is my cause fully schent,
 For *specheles* may noman *spede* (i, 1292-3)
 The *lost* is had, the *lucre* is *lore* (iv, 2590)
 Which *many* a *man* hath *mad* to falle,
 Wher that he *mihte* nevere arise. (iv, 3384-5)
 And thanne he gan to *sighe sore*
 And *sodeinliche* abreide of *slep*. (v, 3670-1)
 Sche hath hir oghne bodi *feigned*,
 For *feere* as thogh sche wolde *flee*. (vii, 3468-9)

最後に、物語を進めて行く際に一番よく用いられる表現は、対応表現である。これまで Diction のところで一寸触れていた如く、語の対応、あるいは文章の対応などが使われている。例えば、今昔を比較する時、*that whilom, which whilom* の構文が一つのパターンとして用いられている。

This lord goth thanne an humble pas,
That whilom proud and noble was; (i, 2183-4)
 And thus began the newe wo,
That whilom was to him so strange; (i, 2328-9)
 Helas, wifhode is lore
 In me, *which whilom* was honeste,

I am non other than a beste,
Now I defouled am of tuo. (i, 974-7)

相反する語を結合して文を組立っている例もある。

Wherof the world ensample fette
Mai after this, whan I am go,
Of thilke *unsely jolif wo*, (i, 86-8)
He drinkth *the bitre* with *the swete*,
He medleth *sorwe* with *likynge*,
And *liveth*, as who seith, *deyinge* (i, 1708-10)
Fulofte and thus *the swete soureth*,
Whan it is knowe to the tast: (i, 1190-1)

主客が顛倒して文の効果をあげているものとしてつぎのものがある。

New stand *the crop* under *the rote* (Prol. 118)
Lo, how thei feignen *chalk* for *chese* (Prol. 416) Cf. ii, 2346.
The chaf is take for *the corn* (Prol. 844)

相対立する語が, rime-word として用いられている場合。

But wolde god that now were on
An other such as Arion,
Which hadde an harpe of such temprure,
And therto of so good mesure
He song, that he the bestes *wilde*
Made of his note tame and *milde*, (Prol. 1053-8)
Unto the vois, in here avys
Thei wene it be a *Paradys*,
Which after is to hem *an helle*. (i, 501-3)
He semeth to be riht *wel thewed*,
And yit his herte is al *beschrewed*. (i, 639-40)

つぎの最初の文は, 対照語が rime-word の位置にあり, 後に続く文と類似した構文である。

That was a Rose is thanne a thorn,
And he that was a Lomb befor
Is thanne a Wolf, and thus *malice*
Under the colour of justice
Is hid; (i, 603-7)
He *clotheth richesse*, as men sein,
Under the simplesce of poverte (i, 612-3)

相対立する語の例。

A man which feigneth conscience,
 As thogh it were al innocence,
Withoute, and is nought so *withinne*; (i, 595-7)
 So that semende of *liht* thei werke
 The dedes whiche are inward *derke*. (i. 633-4)
 And thus be lawe resonable
 Among the wise jugges there
 The Prestes bothe dampned were,
 So that the *prive tricherie*
Hid under fals Ipocrisie
Was thanne *al openliche schewed* (i, 1030-5)

相対立する文が並置されている例。

Right now the hyhe wyndes blowe,
 And anon after thei ben lowe,
 Now *cloudy* and now *clier* it is: (Prol. 923-5)
 The See now *ebbeth*, now it *floweth*,
 The lond now *welketh*, now it *groweth*,
 Now be the Trees with *leves grene*,
 Now thei be *bare* and nothing sene,
 Now be *the lusti somer floures*,
 Now be *the stormy wynter shoures*,
 Now be *the daies*, now *the nyhtes*,
 So stant ther nothing al upryhtes,
 Now it is *lyht*, now it is *derk*; (Prol. 933-941)